

6. 審議内容

1) 番組

(1) 事務局より番組説明

まず、「ラジオできこう！校内音楽会」についてご説明いたします。

11月8日(月)から12月20日(月)まで平日午後4時からの番組「816ラジオ日和」の1コーナーとして放送しました。翌朝の7時から再放送しています。聴いていただいたのは南小学校5年生の音楽物語「走れメロス」、3年生の「さんぼ」です。箕面市内では、毎秋10月終わりから11月にかけて校内音楽会という行事が各学校で行われています。これは各学校の1年生から6年生が歌や合奏を練習して、校内、保護者向けに発表するという行事で、この番組は、この校内音楽会を録音し、学年ごとに紹介するという形で、1学年2～3曲発表される曲目の中から1曲、主に合唱曲を選んで放送しています。

番組の制作意図ですが、私にも小3になる娘がおりまして、その娘が小学校に上がったときに校内音楽会があると聞いて、聴きに行きたいなと思ったのですが、あいにくその日は仕事で行けないということがありまして、残念だと思ったのと、同じ思いをしている保護者が他にもいるのではないかと考えて企画しました。すべての保護者が聴きに行けるわけではない。それならばいっそ、校内音楽会を録音してラジオで放送してみたらどうだろう、と考えたのが放送のきっかけです。このように放送することで今の子どもたちはどんな歌を歌っているのかというのがラジオを通して知ることができます。音楽会に向けて、子どもたちが練習を重ねた成果を聴くことができる。また、何と言っても自分の街に暮らす子どもたちの声をラジオで聴くことができる機会はなかなか無かったのではないかと思います、それを伝えるのはコミュニティ放送の使命の一つなのではないかなど、さまざまな想いを込めて企画しました。

次に、「ラジオまちの情報箱」ですが、豊川南小学校で行われた出前講座「ユメイエ出前講座」の取材番組です。大阪府内で仕事をしている建築家の協会が学校に出向き、子どもたちに模型の家づくりをさせて、どんな住環境が理想か、どんな家に住みたいか、というワークショップを繰り返した出前講座の2日目の様子を取材したものを聴いていただいております。

もうひとつが「ふらっとちゃっと」という番組、月1回第2日曜日に放送している、大阪大学大学院で環境工学を勉強している学生たちがラジオチームを作って制作する番組です。大学院生の視点で環境問題をフラットに話そうという企画で10年近く続いている番組です。なにぶん学生たちがしゃべっていますので、コ

コミュニティ放送ならではの、自分たちの研究を市民のみなさんに発信している、という視点で私たちも編成に取り入れています。以上3番組を聞いていただきました。

(2) 審議

委員長：ただいまより番組審議会を始めさせていただきます。

委員：校内音楽会ですが、機材の問題も有るのでしょうか、趣旨として子どもたちの発表を見に行けない保護者のかたが聴けたら、というイメージは分かるのですが、音源がとても薄っぺらい。聴いていて全く臨場感がなかった。何か工夫ができるのではないかと思います。内容的にも、録っているものを一方的に流すだけで、そこに子どもの声とか先生の苦労話であるとかを一節含むことで、だいぶ親も関心が向いてくるのではないかと思います。そこを改善出来ればもっといい番組になるような気がします。

委員長：事務局としてはどうでしょうか。

事務局：収録に関しては、デジタルレコーダーで、体育館での発表を横や後ろの方で録音するという手法でやっています。機材面の限界ということもあるのですが。あとはなるべく良い音で録れるように工夫を重ねたい。

委員長：でインタビューのやり取り。一方的に流すのではなく、そういった点はどうでしょうか。

事務局：検討したいが、なにぶん全校全学年の子どもたちの声をラジオで聞いてもらうのが目標なので、物理的な問題がある。もう少し人員を割いたり、時間の余裕を持って対応できるよう考えたい。

委員長：せっかくだいい企画だったので、ご意見を生かし、工夫してほしい。

委員：インタビューにわざわざ行くという手法ではなく、出番を待っている楽屋で声をひろうなどのほうが絶対面白い。後から編集して面白いところだけ抜いてくるとかそれぐらいの手間だったら30分くらい前に行け

ばできるのではないか。

委員長：そうですね。子どもの生の声を入れるのはいいですね。ほかのご意見はありますか。

委員：体育館か講堂でやっているんだなぁという臨場感は伝わった。ただ、音が体育館だからか、妙な反響があって、ラジオとして聴くのは少ししんどかったという思いはありました。

委員長：ありがとうございました。それ以外のことで気になったことはありますか。

委員：「ラジオまちの情報箱」は、一口に言って市民の目で出かけるという企画は良いと思った。正直、市民リポーターにしては比較的良かったという実感。「ふらっとちょっと」は対話方式でやっているのが非常に良かった。ただ、これはタッキーに限らずラジオのこれからの問題だと思うが、我々が聴いていたラジオ放送では野球放送なんかはオーバーで臨場感があった。今はテレビのものを解説している感じ。オーバーに伝えないとなかなか臨場感は伝わらない。たぶんこういったことはこれから素人だろうがプロだろうが問われるのでは。もうひとつ、先程の物理的なという話ですが、多分タッキーだけでやるという考えではなくむしろタッキーのファンをもっと活用しないと。養成講座とかいろいろなことをして人を集めて、その方たちに手伝ってもらおうという発想でないと、この厳しい時代にそんなに人は増やせない。温かい目で見えてくれるタッキーのファンをもっと講座等で養成していく。その人達に活躍していただくという仕組みを作らないとますますしんどくなるのでは。

委員長：なるほど。どうもありがとうございます。次に「ふらっとちょっと」に移りたいと思います。

委員：これは学生たちが自分たちで番組をやっているのですよね。目的を持ってちゃんとした夢を持って行動しているのがたいへん若者らしくて素直に入ってきて、たいへんいい番組だと思いました。結構年配の方が聴いていても、若い頃ああいうふうに夢を持っていたことを思いながら聴いていただけのではないかと思いました。あと、「キャンドルナイト」の話の中でも夏至や冬至だとか季節に関することも取り入れて話が

できるというのはいいなと思いました。また聴きたいと思いました。

委員：10年続いているのはすごいですね。

事務局：学生なので代が変わっていくのですが、卒業するときにはまた次の代を見つけてくれています。

委員：聞き手も話し手も普通に話している、ということで非常に入りやすかった。共感を持って聴けた。

委員：私は反対に、年齢もあるかもしれないのですが、あの芝居じみた妙なしゃべりが耳にかかりました。

事務局：ゲストコーナーとは別に、台本を作ってラジオドラマ的に役割分担してしゃべるコーナー部分です。

委員長：学生に丸投げして好きなようにやらせてもらって学生の良さを引き出すためにやったのかある程度こちらから決め事をつくって部分的に仕切ったのかを聴きたい。

事務局：90分まるまる彼らが考えています。

委員：若い人は、我々がうーんというくらい遊ぶ。それはそれで面白くて、彼らが我々と同じような思考パターンで構成していたら、ある種の面白みが無くなる。ちょっとアドバイスしてあげると非常に生きてくるというのがあると思います。

委員：放送時間帯が比較的若い子たちが聞けそうな時間帯だからあれはあれで良いのかもしれない。

委員：90分丸投げで無料で枠を渡してしまっているというのであれば、10年も続いているのであれば、過去の部分もひっくり返してお互い中身がこれでいいのかどうかというのは定期的に考える必要はあるのかと思いました。

委員：ゲストトークの部分は学生が何人かいてますね。そこが分かりづらく、

もったいなかった。内容的にはいいことをやっているし、勿体無いと思いました。

委員：若者の、無茶でも分からないなりに発信しようとしているところはとても感じられた。それがたいへん面白くて、若者たちが一生懸命やっていく中でこういう番組があって発表する場所というか世間に認めてもらうような形で出てきてくれるのであれば、こういう番組はたいへん必要じゃないかと思う。

委員長：若い人が何かをするというのは、若さを強調して破天荒で、突拍子のないことをやってくれるのもかえって魅力だし、その良さも出てくる。その反面、ここのところ分かりづらいとか、ちょっと行き過ぎちゃうとかという面もある。若い人は二面性が極端に出てくると思うんですね。それをある程度軌道に沿ったことをしてもらうようお願いできるのか。規制し過ぎるとまた若者の面白みが無くなってくるし、その線引きが難しいんだなぁというのはご意見頂いて私なりに感じたことです。そのところ大きく見ていただいて番組作りをしていただけたらいいのではと思った。

事務局：次回のゲストやテーマなどは予め聞いて、やりとりはしているが、基本的に彼らが研究していることをラジオを通して分かりやすく発信したいという気持ちを大切にしている。この番組以外にも高校生・大学生との連携番組はあり、大阪大学の放送サークルが開局以来担当している番組、箕面東高校の演劇部がラジオドラマを放送している番組のほか、クラブ活動に中継に行ったり、ゲストを呼んだりというコーナーがあったり、高校生のDJ番組も放送している。また、学生ではないが、大阪大学社会学連携事務局との連携番組もあり、地域の高校生・大学生との連携も地域メディアならではと思っているので、力を入れていきたい。

委員：彼らが冒頭、「この番組は僕らが作りました」とコメントしていましたが、あれがなければまた相当違った目で聞いていたと思う。学生とか若い人たちが作る番組は、こう作った、と最初にきちっとコメントすると、聞き手も違うと思うのでそこが非常に重要な点だと思う。そういう親切さは必要。

委員：せっかく学生たちが自主的にやっているのも、もっと彼らの持っているネットを利用して彼らがこういうことをやっているということを広

めていく。結果的にリスナーも増えるだろうし、彼らの言いたいことももっと広がるだろうし。せっかく学生なので、十分そういう能力があるわけだから、もっと彼らから広げていくというスタンスも必要。

委員長：良いご意見いただきました。せっかく長く続けてきて、ある程度この番組も成熟してきたかなという中で、もうワンランク上げて、もう少し広げる部分と押さえる部分をつくって工夫していただければもっと面白い番組になると思います。よろしくお願いします。

それでは、その他のご意見をお願いします。

委員：タッキー自体は市民に対する情報の提供というのは積極的にやっているのでしょうか。たとえば、こういうイベントをやりたいんだけど良い知恵はないかとか、こういう人を知らないかという問い合わせはあるのですか。

事務局：イベントをやるので紹介してほしいという問い合わせのほうが多いです。

委員：放送局は、番組制作で得た知識を問い合わせに対して全面的に提供していく活動は昔からしている。タッキーがそうならないというのは、何か足りないということなんでしょう。

委員：何かあったらタッキーに聞けば分かるんじゃないか、という気楽さがあるということです。

委員：その関連で、情報の収集方法は、いまどういうシステムになっていますか。

事務局：取材に行った先で取ってくるとか、公共施設に行って取ってくるとか。その中でネットワークができて、教えてくださるとか。

委員：ファンの話ではないが、たとえば町内にひとりずつ情報屋さんがいれば、どうやって発信するかというのは別としてもっと身近なまちの情報が収集できる。そういうファンクラブなりシステムづくりを進めることができれば…。我々勝手に「タッキーを愛する会」を来年発足させようと思っているのですが、もっと身近に市民に情報マンがいっぱいいて、

それがみんなファンで、こんな放送をやるよとか、こんなことをやるよとか、を周りに伝えていく、自分の持っているネットで伝えていく、ということが必要なのだと思います。

委員：どこのコミュニティ FM もそうですが、人員はないわ、お金は無いわでほとんど動けないというのが実際の状態。だから、今仰ったようにタッキーの裏側に「裏タッキー」をつかって、第2キャビネットをつかって、資金の問題とかファン層の拡大とか、番組の制作チームをボランティア的にうまく活動できるように整備していけば。いろんな人がかんできてネットワークができ、ネットワークで仕事するというようにしていったら良いような気がします。

委員長：時間が来ましたのでお開きにしたいと思いますが、社長から一言。

尾池社長：いろいろお話をお聞きして、これからはそういうこともやらないといけないなと色々感じたところがございます。開局 15 年ということになりまして、自分で充実する時期でございます。資金の面も厳しいのですが、なかなかまちそだて・まちづくりは難しく、いろいろ試行錯誤を重ねているところです。いつまでもそういうわけにはいかないの、来年からはまちそだての方も本格的に作動していかなければならないと思っています。いろいろ教えてもらうことがたくさんあるかと思っておりますので今後ともよろしくお願い致します。

委員長：これにて第 27 回番組審議委員会を閉会致します。ありがとうございました。

7. 審議機関の答申または改善意見に対して措置および年月日

なし

8. 審議機関の答申または意見の概要を公表した場所における公表内容、方法

自社放送
事務所への備置

ホームページ (<http://fm.minoh.net/>)

上記事項を明確にするため、この議事録を作成する。

平成 22 年 12 月 24 日

箕面 F M まちそだて株式会社 番組審議会